

七三郎句集



中村七三郎



五世中村七三郎襲名披露
寿对丹前 大正九年 市村座

序

亡くなった俳優中村七三郎さんの句集が、御遺族の手で刊行されるに当り、その序文をといふ話が齎された。

一人息子の安田精一君が丸ビルのホトトギス社にやって来た。以前に逢ったことがあるかとも思ったが、はっきりした記憶は私になかった。七三郎さんを童顔にしたとも思へる、小柄な四十代の人であった。

携へた風呂敷包から、清書した句稿の部厚な原稿の束を私の前に置いた。「父が生前にちゃんと「ホトトギス」や「玉藻」、「櫂」に出句した句を、手帖に三千句程書き残してありましたので、その中から、「ホトトギス」に入選した句だけを抜き書きしてまとめました。父は句集を出すやうに生前から遺言してゐたのですが、今日になってしまひました。」

「七三郎さんをよく知つてゐるのは、妹の星野立子なんかの方が確かですが、私は私なりに、又知つて居る面から書いて見ませう。」

精一君と打合せは簡単に出来た。

遺されてあった入選句帖の第一頁には、大正十五年二月に虚子選として

雛市や五人囃子の売れ残る

又たけし選として

今年又一つふえたり雛箆笥

の二句が並んで記されてある。そして次に昭和五年にとんで『ホトトギス』とあって

東風吹くや富沢町の紺暖簾

があり、続いて六月号として

行春や鏡台前の郷右衛門

郷右衛門九太夫と春惜みけり

の二句が並んで記されてある。

生前からの遺言として自分の句集刊行を云ひ残してあったといふ七三郎さんは、

自らその稿本を用意深く保存してゐたのである。

精一君は別に故人の短冊を用意してあつた。それは句集の新年四季のはじめの頁に挿入するつもりであると云つた。又くまどりの紅を移した半折に、贄をした一軸もあつた。それも句集の中に挿入することであつた。

日を改めて精一君は私の居る日活アパートに訪ねて来た。私は精一君から七三郎さんについて色々な話を聞いた。

七三郎さんは昭和二十三年の七月二十九日に亡くなつてゐる。その十日前に楽屋で発病、逡信病院に入院し、意識を恢復することなく逝かれたのである。病に倒れた日には、七月興行の三越劇場で、四谷怪談の小判洗ひの役で出て居つたが、かけ持の有楽座へ出かけて、そちらの楽屋で衣装替への直前に一発病したのださうである。

精一君が出征中に、七三郎さんの北鎌倉の家は売却されてしまつて居つた。戦争の末期で、いつ戦災に遭遇するかも知れぬといふ考へから、居を移すことになつた

らしかった。

歌舞伎役者としての七三郎さんの経歴については、別に語られることであらうが、その昔素人から役者になり、関西で先代中村雁治郎の一座にあったこともあるといふことであつた。それが縁あつて中村吉右衛門のもとに移り、大正九年に市村座で名題に進んだのださうである。素人時代には座頭格で、和事役に味があつたとも聞いたことがある。

芳町の「百尺」の俵として育つてゐて、七三郎さんは役者になつた人である。七三郎さんの令弟に安田鞞彦画伯が居られることはよく知られて居る。その関係から、中村吉右衛門丈と鞞彦画伯との深い交りがつゞけられたのであつた。

中村七三郎といふ役者名は由緒のあるものと聞いた。七三郎さんは五代目に当る。代々俳号を「少長」と称して、七三郎さんは短冊の署名にこの俳号を用ゐてゐた。

七三郎さんの俳句は、役者の余技といふやうなものではなかつた。無理は絶体にせず、正直に何でも描くといふ行き方であつた。殊に役者の身边を描き、芝居に取

材する特殊な句に至っては、誠にお手並立派と云ふことをはゞからない。それはこの句集の中からいくらも例に取り上げることが出来るところである。

京都の顔見世狂言に出演する機会も多かったが、出番の間の暇があると、洛中洛外の名所仏閣などをよく訪ねて、作句の楽しい時間を持たれてゐた。私は七三郎さんと二三の俳人諸君と、梅雨の烈しい一日、思ひ立って京都西山の十輪寺を尋ねたことがあつた。十輪寺には業平の墓があると伝へられてゐた。雨に濡れもして、業平の墓へ詣つたことも印象に残つてゐるところである。

七三郎さんの句集の序文を書くつもりが、たゞ思ひつくまゝを記して行つただけに終つたことを申訳ないと思ふ。なほ七三郎さんについて色々書く方もあると思ふが、この一文を以て序に代へさせて頂くことを、精一君や御遺族の方々、及びこの句集を御覧になる皆様に対し、お許しを乞ふ次第である。

昭和四十三年五月二十五日

東京、芝公園 日活アパートにて

高濱年尾

床山の顔がのぞけり初鏡

つく手毬つかぬ手毬と両脇に

雛市や五人囃子の売れ残る

今年又一つふえたり雛篋

糊
の
鍋
か
た
む
く
ま
ま
に
雛
作

東
風
吹
く
や
富
沢
町
の
紺
暖
簾

行
春
や
鏡
台
前
の
郷
右
衛
門

郷
右
衛
門
九
太
夫
と
春
惜
し
み
け
り

啓
蟄
の
大
地
に
杭
を
打
つ
響
き

か
ら
く
り
の
か
た
ん
と
地
獄
彼
岸
婆

提
灯
の
く
ら
き
貴
船
の
宵
祭

温
泉
の
町
は
橋
に
出
て
尽
き
麦
の
秋

家
う
つ
り
の
額
の
花
さ
く
日
も
近
く

大
雨
の
供
華
な
き
墓
や
業
平
忌

かたこととおちよぼ出て行く日傘かな

住なれて今年は枇杷の生るらしき

切株にくさびら生ひて宮の秋

名月の大石段を徐に

菱 売 の 菱 に か く れ し 金 魚 かな

秋 天 に さ し あ げ ら れ て を る 子 かな

雨戸くる隣の家や夜の秋

円覚寺ほとりに住て落葉焚く

冬
耕
や
田
圃
の
中
の
男
塚

冬
め
き
て
も
の
の
影
濃
き
夜
と
な
り
ぬ

貸草履並ぶ冬日や西芳寺

藪柑子根笹の
中に赤きかな

あとがき

中村七三郎事安田直次郎は、明治十二年東京日本橋新葎町の、百尺^{ひゃくせき}三代目安田松五郎の次男として生れた。百尺は幕府時代お留守居役の寄合う料亭で、松平確堂が木更津二汲屋から移った初代松五郎の松に因んで、「亭々百尺雲辺聳」から命名されたと伝えている。確堂は十一代將軍家斉の十六子で、風流人で知られているが、公武合体の勅托を受け維新の際に活躍した人である。

三代目松五郎は養子であるが、料亭の業を子供等に継がせるのを好まず、兄を商業予備門に学はせ又堀留の犬麿に奉公させた。兄は書が好きで小此木觀海に学び、その高弟となり、觀水の号を与えられている。当時同じ位の少年山岸荷葉が両国中村楼の大広間で大字の筆を振り、神童の名を馳せたので、父もそんな下心があったのかも知れない。その頃父が、兄は堅人だが弟(私)の方は将来道楽者になりそうだ

といったと聞いてい。

明治廿九年父は病んで没し、遺言によつて百尺を友人小山氏に譲り、義母は私を連れて上根岸へ移つた。堀留の前川に奉公中の兄はまもなく退いて、日本橋仲通りに千尋屋ちひろやという大島紬の店を開いたのである。

兄は以前から芝居好きで型などを書き集め、一種の劇通になつていた。近くに住む医師森篤二郎(森鷗外の弟)が三木竹二と号して、『歌舞伎』という研究誌を主宰していた。兄の幼少からの友安田善之助(二代目善次郎)の出資で、岡鬼太郎・鍋木清方・山岸荷葉・伊臣紫葉の諸氏のグループに入つて、型の研究や劇評などに加わつたのである。

当時の人で健在なのは清方さんだけで、遠藤為春氏はまだ若旦那で、よく兄の店へ来て芝居の話に耽つていた。

私は明治から大正へかけて、療養生活を送り漸く大磯へ来り住んだ。その頃のこととて、新富座の素人芝居に招かれ、久し振りで上京した。扇屋熊谷の場で、待合蜂

龍の主人だったかが熊谷、扇折の義経が新橋の名妓清香であったが、姉輪の平次で現れた兄のうまさ、全く他を圧倒して大喝采であった。私はこの時から兄は役者になる決心をしたかとおもうのである。踊はいつ習ったのか日本橋の名妓六琴との噂があつたから手ほどきはその辺かとおもう。その後まもなく大磯で勸進帳を演じ、宗家堀越から苦情が出たことがある。

私達の伯父が以前大阪に居たのでその縁で、兄は初代雁治郎に紹介された。伊臣紫葉の言葉を借りると、「お世辞屋の雁が賞めて、その妻の反対を斥け、兄を中村扇玉と名乗らせて舞台へ出した」という。それはあまり続かず小芝居や旅廻りに苦労した末、以前から縁故のあつた、吉右衛門の一座に入り、大正九年劇通諸氏の援助を受けて、江戸の名優七三郎を相続し、市村座に於て、六代目菊五郎・吉右衛門・三津五郎の口上で、襲名披露をしたのである。

昭和三年本郷座に、落語からとつた喜劇らくだで、播磨屋の屑屋にからむ兄のらくだの死人の踊で大当りをとつたが、何と云つても楽屋内のしきたり、自分の柄、

そういう事でやりたい役は廻って来る筈はなく、今更ながら諦めの境地に入ったものと思われ、追々俳句の方へ熱中してきたのではかるまいか。俳句は書とともに、吉右衛門の軽妙と豊さではとても及ばないが、「郷右衛門九太夫と春惜みけり」の如き、兄程度の役者の哀歓がにじみ出ている。

廿三年七月廿日夜、有楽座の楽屋で倒れ、同じ舞台に出演中の皆さんのお世語になり、翌日、逓信病院で厚い手当を受けたが、廿九日に永眠した。行年七十歳。吉右衛門は見舞にも告別式にも来られ、菊五郎その他の諸家も会葬されまことに光栄であった。

兄嫁おひさも永年吾儘の兄の世話をし苦勞を共にした。倅の精一と思立ったこの句集刊行によって勞を慰めて欲しい。

昭和四十三年六月

安田鞞彦

七三郎句集

昭和四三年七月二十日発行

著者 中村七三郎

序 高浜 年尾

あとがき 安田 鞆彦

編集後記 安田 精一